

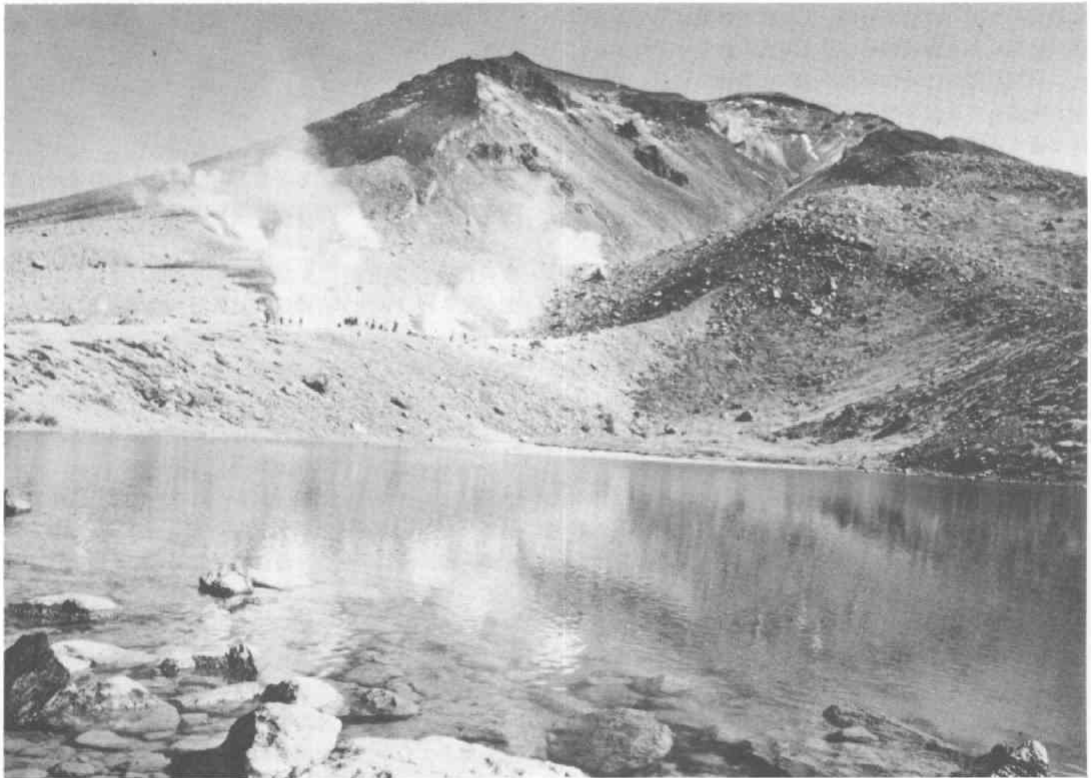
# かぐらおか

第 29 号

昭和56年11月1日

編集 旭川医科大学  
厚生補導委員会  
発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は前学長 山田守英氏)



(写真撮影 医学部附属実験実習機器センター 宮川清志)

旭岳姿見の池

## 内 容

病 理 医……………下田 品久… 2	第24回東日本医科学生総合体育大会…………… 6
日日想うこと —卒業25周年記念会に出席して— ……坂井 英一… 3	研究室紹介……………奥野 晃正… 7
海外だより NIHでの1年……………毛利 義臣… 4	昭和56年度解剖体慰霊式…………… 8
第7回医大祭…………… 5	「かぐらおか」表紙写真募集!!…………… 8
医大祭を振り返って……………向山 新… 5	窓 外……………天羽 一夫… 8
第28回北海道地区大学体育大会…………… 6	

# 病 理 医



下 田 晶 久

旭川医科大学の創設に密接な関わりを持つわが国の医師増員計画は、当初の目標を人口十万人当り医師 150 人に設定したといわれているが、この政策目標は早くも 1985 年には達成され、1990 年には 220 人を超える予測となった。当初目標数は 1960 年代の米国の数値に近似しているが、米国もまた目下増員計画を推進中であり、1990 年には 245 人に達する予測であるという。しかし、国民医療の充足は単なる総医師数の増加によって解決されるものではなく、医師の地域分布が問題であることは周知の事実であるが、もう一つ忘れてならないのは医療の進歩に見合った各専門分野間の医師数の均衡の問題である。わが国において現在その充足が著しく立ち遅れている専門分野の一つに病理医が挙げられる。

病理医とは、診療陣の中に身を置き Biopsy (生検) や Autopsy (剖検) を通して個々の患者の病理学的診断に従事する専門医をいう。わが国では、これを専門として病院に進出していた数少ない pathologist が第二次大戦以前にも見受けられたが、広く一般にその必要性が叫ばれるようになったのは、中央検査制度の導入に象徴される終戦後の病院の近代化と軌を一にしている。したがって、日本語の「病理医」という言葉も生れて未だ 30 年そこそこの歴史しか持ち合わせていない。日常診療の中で病理学的診断がどのように利用されているかを考えてみると、生検は血液や尿を検体とする検査とは異り、患者の肉体の一部を切り取って検体とするわけであるから、その適用には自ずと制約があって手軽には行えないと考えられがちであるが、疾患によってはそれなしには診断を確定し得ず治療方針が定まらないものがある。それらの代表として悪性腫瘍が挙げられる。しかも近年の針生検や内視鏡生検といった新しい技術が、外科的な手術を要せず体組織の小片を採取することを可能にしたこともあって、生検診断の件数は戦前に較べて飛躍的な増加を示している。一方剖検は、患者を死に到らしめた諸臓器病変の有機的な関連を解明するに留まらず、生前その個体に加えられた医療の最終評価を併せ行う行為であって、これまた新しい診断法や治療法が盡きることなく開発されてゆく医療の世界においては、永久にその需要は低下することなく、また低下させてはならない性格のものである。反省と評価を伴わない医療行為からは正しい医学の進歩は生れない。

このような役割を、病理医という職能が分化していなかった時代のわが国では——現在もおおその延長線上に

あるのだが——誰が担って来たのかというと、それは数少ない例外を除いて専ら大学医学部の病理学講座が果たして来たのであって、各医療機関は生検組織や遺体を病理学講座へ送り診断を依頼するという方式で行われて来た。大学附属病院と雖もその例外ではない。教育・研究機関としての病理学講座は、本来それらの中から教育・研究に供する素材を得る立場に立つものであって、患者個人と医師との間に成立する診療という次元からの独特な要請には即応し得ない諸々の限界を内在させたまま、可能な限り診療に協力してきたに過ぎない。他方、病理学講座の担う研究分野にも自然科学の進歩に伴う急速な拡大が見られ、病理学者の研究対象は多岐に分散した。

“patient-oriented pathologist”これが病理医の真の姿である。いち早く診療陣の一員として病理医を専門分化させたのは米国であるが、その米国における病理医の全医師数に占める比率は 1970 年代ですでに 3.5% に達している。ただし、この数値は clinical pathology, surgical pathology, neuropathology 等々の細分化された領域全体を合せた pathologist の数であって、日本流にいうと病理医と臨床検査医を合せた数値と考えられる。翻ってわが国の現状はというと、終戦後病院の近代化が進む中で医療のスタッフとして病理医を組み入れる病院が徐々に増加したが、その進展はなお遅々としている。昭和 33 年に数十名で結成された日本病院病理医協会の会員数は 23 年を経た現在およそ 430 名となったが、これに臨床検査医を加えても到底全医師数の 1% にも満たない数である。病理医養成の急務が真剣に論じられなければならない。患者に接する機会に恵まれない病理医に求められている患者志向の態度を養うには、みずから生検診断を下す患者についてそれ以前の臨床経過はもとより、診断後の転帰をも知ることが大いに役立つ。共通の患者について臨床医との対話を日常的に持ち得る環境で養成されることが望ましい。本学創設当初から計画されていた病理部は、患者の生検・剖検業務を集約する中央診療部門の一つとして位置づけられ、附属病院の診療体系を近代医療に相応しい形に完成させるべく立案されたものであるが、同時に、時代に適合した有能な病理医を養成し、国内でも特に病理医過疎の状況にある北海道内から先ず充足してゆく一拠点としたいという悲願が込められている。卒業生諸氏の活用を期待するものである。

(病理学第一講座 教授)



# 日日想うこと

—卒業25周年記念会に出席して—

坂井 英一

9月17日、登別の第一滝本で、医学部卒業25周年記念祝賀会があり出席してきた。恩師2名、同期生63名(75%の出席率)および同伴御夫人13名の計78名が参加した。年月の流れは本当に速く、昭和31年3月に卒業して25年があつという間にすぎた。入学時より30余年も過ぎたのに、その日、映写された古い時代のスライドをみていると、殆んど顔つきが変らない人もあつたが、白髪がみられたりして昔の姿とかなり変貌した人もあつた。しかし、語りあえば、どこかに昔の感じがみられて楽しいときであつた。

人の数年先のことは明確に、推測しえないと、いわれているが、25年たった今、その頃のことを少し記してみよう。

卒業時85名であつたがインターン時代1名が事故死した。しかし、その後、84名全員、健康に恵まれていた。専攻別では基礎教室2名(病理1、生化学1)と少なかった。いま、考えてみると、もう少し多くの人が基礎医学をと考えます。それは、やはり臨床では出来ないことを解決してくれる期待があり、それが臨床に結びつくことが重要であると考えからです。大部分の人は臨床教室に入り、内科36名、小児科6名、精神科3名、皮膚科2名、放射線科2名であり、外科19名、整形外科5名、婦人科5名、泌尿器科3名、脳神経外科1名であつた。眼科および耳鼻科の教室に入った人がいなく、これらの科へ紹介するのに不便を感じたことをおぼえている。

その後、25年間に内科より公衆衛生へ1名、放射線科へ1名、病理へ1名が変つた。病理学教室で学位を取得した1名がその後小児科を専攻した。専門科目の変更は思ったより少なく、卒業時の専門の選択には十分考慮されるべきことなのだろう。

数年たって大学の教室をはなれ始め、25年たった今、開業医45名、勤務医39名(大学10名)となり、居住地は道外12名、道内72名で、札幌市30名、旭川市9名、函館10名と都会に居る人が多い。

外国へ留学などした人は十数名いるが、大部分がアメリカであり、イタリア、ドイツ、イギリスなどに行った人もいる。大部分の人が英会話で苦勞し、学生時代にもっと勉強しておけばよかったというのが本音であろう。学生時代、就寝時にテープをききながらというのも一法である。英語が堪能であれば、外国人の心にもふれ、また、学ぶことも多いにちがいない。

55年の統計によると日本の癌死亡者数は16万人をこえ、私

の専門としている肺癌の死亡率は毎年増加している。日本の死亡者数21,291人のうち北海道1,132人(男831、女301)旭川市69人(男56、女13)であつた。このままの状態が続くと大変な数字になりそうで、一日も早く、早期発見のための検診体系が出来るよう願っている。

レントゲン写真には現れない肺門部の扁平上皮癌は手術成績がよく、予後がよいといわれている。この群の癌は喀痰細胞診で早期より診断されるので、この分野への応用が急務と思う。

家族に癌患者がいて大変苦勞をしている同期の数名の人々がいた。そして患者に癌を告げるべきか否かが話題となった。一般に日本人は宗教心が薄いので難しいだろうということが半数以上の人の意見であつた。私達にとって、この「癌を本人に知らせるべきか否か」はこれからの大きい課題と思う。

25周年会に来られなかった同期のI君が癌と診断された。彼は某がんセンターで癌の治療の中心の人である。その院長さんはI君に癌であることを告げ、直ちに手術を行った。私は早速、I君に見舞状を書きかけたが、なかなか筆が進まなかつた。どうにか短い文が書けて投函した。しばらくして、元気になったと返事をくれた。そして、そこに「今後、どの程度のことが出来るかは未知であるが、与えられた運命と考え、生命ある限り癌患者の治療につくしたい」とあつた。

癌を治療中の医師が癌患者の治療にあたるという厳粛な場面を考えると言葉にはならない何かを感じた。

これから25年後はどうであろうか。癌の早期発見が腫瘍マーカーなどで容易になったり、癌の化学療法が進歩して手術をしなくても治癒する時代がくるだろうか。

いま、癌で死亡する人が少なくなることを切に祈っている。

(内科学第一講座 助教授)



\* 海外だより \*

# NIHでの1年

毛利 義 臣

昨年7月から丁度1年間、米国ワシントンD.C.の近郊にあるNIH (National Institute of Health)で、てんかんに関する研究をしてきました。帰国して2か月、ようやく日本の臨床医の生活スタイルに慣れてきましたが、週休2日、当直なし、深酒なしの留学生活でなまった身体をきたえ直すのに苦労しました。

私が行っていたのは、NIHの中のNINCDS (National Institute of Neurological & Communicative Disorders and Stroke)、通称Neurology Instituteとよばれている部門の中のLaboratory of Clinical Neurosciences Branchで、Kindling effect (燃えあがり効果)を用いたてんかんの実験的研究に従事していました。このNINCDSには日本各地から常時数人の日本人研究者が来ていましたが、すぐ隣には、米国でも有数のガン研究施設であるNCI (National Cancer Institute)があり、ここにも多勢の日本人研究者が働いていました。昨年9月から今年5月にかけて、NCIの日本人が中心になってJ. S. C. (Japanese Scientist Club)なるものを作り、毎週1回、自分の研究内容を日本語で発表する集りがありました。内容は、第1回、トミザワジュンイチ氏『DNA合成の開始』、第2回、ヒラタフサオ氏『生体膜の情報伝達機構』、第3回、シマタケヒロユキ氏『分化決定機構の分子生物学』というように、いわゆる分子生物学の分野のものが主で、私などには日本語で聞いてもとうてい理解の範囲を越えており、欠席することが多かったのですが、いずれもその分野では世界のトップレベルをいく内容だったようです。ちなみにNIHの職員数は約15,000人、そのうちDr. (Ph.Dも含む)が2,300人、日本人Dr.は250人位で、約1割を占めています。

NIHの内部機構は、機能分化がみごとになされており、それなりに評価はできますが、その反面、何をするにも手続きや書類が多く、その処理テンポが遅いことなど、日本という“お役所仕事”にウンザリすることも多々あります。その上、NIHは政府機関であり、地理的にも大統領のお膝元ということもあってか、多くの女性や黒人が雇われており、Secretary、Technician、掃除婦などとして働いていますが、その非能率ぶりには呆れるばかりです。この2月、Reagan政権になり、ある意味で当然のような気がしました。もともと、その政策のあおりで外国人研究者はもちろん、Permanent staffでない米国人研究者も戦々兢兢としていました。外国人の場合、Visiting

Associate以上の待遇の研究者は、従来のように1年毎のExtensionが困難になり、研究半ばで帰国する人も何人かいました。ただ、そこにLab. chiefの政治力が微妙に影響することも事実で、この辺は日本と同様のです。いずれにしても今のような米国の経済事情が続けば、今後日本からNIHへ行くことはむずかしくなると思われます。

私の住んでいたアパートは、ワシントンから車で約30分の近郊にある巨大なApartment complexの一角で、実に国際色豊かな所でした。首都に近いので、各国の大使館に勤めている人や、NASA、IMF、世銀で働く人など多種多様な人たちが住んでおり、アパート付近で知り合った人だけでも10数か国にのぼります。そんな環境のためもあるのか、自分たちが外国人扱いられているという気持ちはあまりなく、日本に住んでいる外国人が持つであろうと思われる“外国人としての意識”は経験しなかったように思います。現代のような国際化社会では、それが当然で、その開放性が米国の良さなのかも知れません。

米国民の生活は、一言でいえば、“働く婦人に便利な”生活様式という印象です。台所の設備、冷凍食品(とくにTVディナーの類)、コインランドリー、ベビーシッターの普及などをみると、親が居なくても子供は充分に生活できるし、主婦が居なくても夫はそれほど困らないといえるでしょう。一方、夫の仕事は日本と比べて甚だ多く、外回りの雑用はすべて男の仕事に属するようです。広大な庭の芝の手入れは、土曜か日曜の大きな仕事で、私などは一軒家に住めなかった幸運を感謝せずにはいませんでした。また、米国では、“便利なことにはすべて金がかかる”といわれるように、労賃、手数料が非常に高いため、何事も自分の手でやる習慣がついています。したがって、男性は機械類その他の外の仕事に精通していなければならない、本屋には、車の修理、家のペンキ塗りなどの“How toもの”が氾濫し、Hardwareの店がにぎわうということになります。私のような典型的(?)日本人には肩身の狭い世の中でした。

日本に帰って、ガソリンスタンドの店員が、手数料なしでガソリンを入れてくれ、ガラスまで拭いてくれた時には感激しました。

(精神科神経科 講師)

## 第7回

## 医大祭



第7回医大祭は、企画の「学生講演会」、「医学展講演会」、「渡辺淳一公演会」、「ダンスパーティー」等、多彩な催しを経て、6月18日(木)の仮装行列で幕が開きました。

「謳いつげ この熱きものを しめせ俺達の力を」をテーマに開催されたこの医大祭は、20(土)・21(日)日の一般公開日には約5,000人の一般市民が訪れ、医学展、模擬店等賑わいを見せ、盛況のうちに後夜祭をもって終了しました。

(学生課)



## 医大祭を振り返って

向山 新

「謳いつげ この熱きものを しめせ俺達の力を」をテーマに掲げた第7回医大祭も無事終了しました。今回の医大祭は、数多くの収穫を残し、また数多くの教訓を残してくれました。来年の医大祭に向けての展望も交えつつ、今年の医大祭を振り返ってみたいと思います。

まず、何といっても、昨年を1,000人上回る5,000人もの市民のかたがたが医大祭を訪れたことが一番の収穫といえましょう。好天に恵まれたこともあり、玄関前には自転車があふれ(この点は、わが旭川医大の立地条件、交通の便の悪さによるところが大きいかと思いますが)、各医学展、模擬店にも多くの市民の姿が見うけられました。学祭の目的の1つに掲げられている「市民との交流」が十分に行なわれたことと思います。もう1つ、今年の大きな収穫といえるものに、「学生講演会」の開催を挙げることができると思います。学生の考えを公の場で講演という形で発表する機会は今までありませんでした。普段から活動の成果を発表する機会が少ない文化系サークル等の新しい発表、主張の場として今後とも続けてゆきたい企画といえましょう。その他、数多くの学生の参加

を促すための企画としては、昨年を引き続いて「ビックリ旭医新記録」が種目も一新されて行なわれ、いくつもの新(珍)記録が生まれました。また、別の意味で学生の自主的活動を進めてゆくものとして、生協の展示即売会も大きな成果を上げたといえましょう。こういった、学生に様々な活動の場を提供し、学生の自主活動を盛り上げるという、もう1つの学祭の目的も果たせたものと思います。ここで2つの目的が出たついでに3つ目の目的「教官職員との交流」について、少し触れてみたいと思います。先生方も職員の方も皆さん忙しいようで、な



かなか当日の企画には参加しにくいようです。スポーツ大会には多くの参加をいただいておりますが、その他の企画でも直接、間接の協力、援助を含めての参加をこの場を借りてお願いしておきたいと思っております。

さて、毎年恒例となっている企画のほうへ目を向けてみましょう。今年は医学展の数が6つと例年になく多く、部屋割りにも困るほどで、市民にも「救急医療」など、なかなかの評判でした。市民大学講座では、教育大の福田教授の「国民と裁判」を取り入れたり、「ガン」や「心身症」などタイムリーな内容を扱うなどして、多くの方を集めることができました。スポーツ大会は、今年から始まったテニスを含めて体育館、グラウンドで熱戦が繰り広げられ、医大祭の一大イベントとして欠くことのできないものとなっています。模擬店もますますその数が増えて過当競争気味。内容的に似通う店が多いためか、どこも客集めに苦しんだようです。来年からは、少々工夫が必要でしょう。仮装行列は山車が4つと少なく例年になく寂しいものとなってしまいました。学生全体の覇気のなさがここに反映されているように思われました。仮装行列といえば医大祭のまつりとしての部分の多くを占めるものだけに、今回盛り上りに欠けたことは非常に残念なことでした。その他、渡辺淳一公演会、ダンスパーティー等の企画も多くの市民、学生を集めました。

最後に、今年の医大祭に協力していただいた皆さんにお礼を述べるとともに、来年以後もより一層の協力をして下さるようお願いしたいと思います。

(第7回医大祭実行委員会企画局長)

第 28 回

## 北海道地区大学体育大会

第28回北海道地区大学体育大会は、北海道教育大学釧路分校が当番校となり7月17日から20日までの4日間、全道40単位大学から約3,600名が参加して開催された。本学からは10種目（女子弓道はオープン種目）に134名が参加した。

今大会は、準硬式野球 3位、バスケットボール 3位、陸上競技 4位（3年山本 5,000m 1位、1,500m 3位、4年小黒三段跳 1位、110mH 2位、6年稲尾槍投 1位、砲丸投 1位、円盤投 3位）等、全種目に善戦健闘したが、例年に比べてふるわず、総合成績は男子の部13位女子の部23位であった。

来年度は本学が当番校となるので、新たな健闘を期待する。  
(学生課)



第28回北海道地区大学体育大会成績一覧

種目	順位	優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技	男	北大	北学園	釧教大	4位
	女	道女短	旭教大	帯大谷	
硬式野球		北学園	道都大	札教大 旭川大	
準硬式野球		室工大	釧教大	道都短 旭医大	3位
軟式庭球	男	旭川大	帯畜大	道都大 樽商大	2回戦敗退
	女	栄養短	文女短	旭教大 藤教大	
バスケットボール	男	札商大	室工大	道都大 旭医大	3位
	女	道女短	札教大	藤教大 旭教大	
バレーボール	男	札商大	帯畜大	旭教大 北学園	1回戦敗退
	女	静修短	北星大	釧教大 旭教大	
サッカー		札商大	旭教大	北星大 北学園	1回戦敗退
卓球	男	旭川大	釧教大	帯畜大 北学園	

種目	順位	優勝	準優勝	3位	旭医大
卓球	女	栄養短	旭教大	帯畜大 静修短	
	男	北学園	北大	札教大	2回戦敗退
バドミントン	女	道女短	札教大	旭教大	
	男	道都大	道都短	北学園 樽商大	
剣道	男	道工大	東海大	岩樽大 樽商大	予選リーグ敗退
	女	道女短	酪農大	北星大 札教大	
弓	男	北学園	北見工	帯畜大	11位
	女	北大	帯畜大	北学園	10位
ハンドボール		北大	樽商大	旭教大	
総合	男	北学園	札商大	道都大	13位
	女	道女短	旭教大	栄養短	23位



## 第24回東日本医科学生 総合体育大会 (夏季大会)



第24回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)は、東京医科歯科大学医学部が主管校となり7月24日～8月5日までの13日間にわたって行われた。

本学からは17種目に268名が参加、前年度優勝の陸上



競技部は少数精鋭で望み、中でも3年山本は中距離3冠となったが多勢の新潟には勝てず惜しくも2位、バスケットボールは準決勝で、強敵北大に敗れはしたが3位決定戦で秋田に勝ち3位、卓球・空手は4位と各種目に善戦健闘、総合成績は35大学中13位であった。

(学生課)



第24回東日本医科学生総合体育大会(夏季大会)成績一覧

種目	順位	優勝	準優勝	3位	旭医大
陸上競技		新潟	旭川	慶応	準優勝
準硬式野球		群馬	山形	東北	1回戦敗退
硬式庭球	男	順天	筑波	慶応	3回戦敗退
	女	慈恵	女子医	慶応	2回戦敗退
卓球	男	千葉	福島	埼玉	4位
	女	福島	千葉	日大	予選リーグ(ブロック4位)敗退
バレーボール		群馬	岩手	新潟	決勝トーナメント1回戦敗退
バドミントン	男	自治	福島	医歯	2回戦敗退
	女	新潟	女子医	札医	々
サッカー		信州	独協	群馬	々
バスケットボール	男	北大	福島	旭川	3位
	女	北里	女子医	東邦	1回戦敗退
柔道		聖マ	岩手	群馬	予選リーグ敗退
剣道		群馬	順天	独協	決勝トーナメント1回戦敗退
弓道		新潟	昭和	千葉	9位
空手道		東医	日大	信州	4位
水泳	男	福島	日医	慈恵	々
総合		福島	群馬	新潟	13位



## 研究室紹介

### ■ 小児科学講座 ■

奥野晃正

小児科のスタッフを紹介すると、この7月1日病院長に就任された吉岡教授を筆頭に、成長・内分泌の奥野助教授、感染症・抗生物質の滝本講師、内分泌の田口外来医長、神経・アレルギーの長病棟医長、感染症・消化器の井関助手、新生児・血液の岡(敏)助手、心臓の岡(隆)助手が診療と教育の責任を分担している。元講師の丸山、藤田も助っ人として参加してくれるので心強い。研修医、大学院生、研究生は総勢18名で、病院開設以来のローテーション・プログラムに従って診療と研究に当たっている。

小児科の特徴として、広範な疾患を対象としなければならぬため、自然発生的に診療部門ごとに研究グループが出来上がっている。これらの研究の中核となっているのは、教授多年の仕事である「発達薬理学」で、抗生物質解熱剤、ホルモン剤、抗けいれん剤、喘息治療薬、強心剤、ビタミン剤など各グループで取扱うことの多い薬剤の薬物動態に関する研究は、教室の看板となっている。特に抗生物質の吸収・排泄、ホルモンの分泌・代謝を反応速度論の立場から数学的手法で解析した Pharmacokinetics の研究は他の追随をゆるさぬものとして、高く評価されている。新しいところでは、免疫異常、腸内細菌叢とくに嫌気性菌、ソマトメジン、ビタミンEに関する研究が若手を中心に軌道にのりつつあり、成果が期待されている。最近、注目を集めている情緒障害児の治療、新生児未熟児集中治療も教室の重要部門に発展するものと思われる。

毎年の行事をあげれば、次のようなものがある。春の新人歓迎会は、各人が特技を示すチャンスであり、最初に能力を試される場でもある。運動能力と体力は、新旧対抗の紅白野球で評価され、今年のはめでたく引き分けに終わった。やがて学会シーズンに入ると、楽しみと苦しみを交互に、同時に味わうことになる。最大のイベントとは忘年会で、医局・研究室を開放し夜を徹して体力のつづく限り、飲み、喰い、唄い、踊り、時に他教室のひんしゆくを買うほどの騒ぎとなる。

忙しい診療と研究の合間につかの間のやすらぎと楽しみを与えてくれるのは、抄読会と症例検討会の後の一杯のビールである。教室開設以来、その有能ぶりを発揮してくれる田中事務官の心くばりか、やんちゃ坊主の圧力のためか、医局の冷蔵庫にビールの切れたことがないのは、教室七不思議の一つであろう。

(小児科学講座 助教授)

## 昭和56年度解剖体慰霊式

昨年度まで東本願寺旭川別院において執り行われていた解剖体追悼法要は、今年度から解剖体慰霊式に改め、会場を本学体育館に移して9月16日(水)午後1時30分から執り行われました。

菊を並べた祭壇を前に、参会した御遺族・来賓・本学教職員ら250名は、昭和55年9月1日以降昭和56年8月31日までの間に本学学生の教育及び学術研究のために尊い遺体を提供され、医学発展の礎石となられた134名(病理解剖80名、法理解剖26名、系統解剖28名)の方がたの遺徳を忍び御冥福を祈念しました。

解剖体御芳名奉読、15秒間の黙とう及び学長・学生代表(第3学年一色学君)の追悼の辞のあと、参会者1人1人の手による献花が行われ、吉岡副学長の謝辞をもってしめやかなうちに今年度の慰霊式が終了しました。

なお、慰霊式終了後、御遺骨返還並びに学内見学が行われ、また近文墓地内にある納骨堂では御遺族の方々による参拝が行われました。

(学生課)

## 「かぐらおか」表紙写真募集!!

—「かぐらおか」の表紙をあなたの写真で飾りませんか—  
本誌「かぐらおか」表紙写真を学生・教職員の皆様から募集することになりました。写真に興味のある方、これから写してみようと思う方、どんどん応募してください。

作品は適時広報誌編集小委員会でテーマを設定しますが、現在は「旭川市内及び旭川近郊の名所シリーズ」として募集しています。(第20号から本号までに掲載した場所は除きます。)サービスサイズからキャビネ判までの写真裏面に学生証番号(教職員にあっては所属)、氏名、題名を記入し、学生課学生係に随時提出してください。出品作品は原則として返却しないので、あらかじめ御了承ください。

なお、写真採用には謝金を支給します。

不明な点等ありましたら、学生課学生係までお問い合わせください。

(広報誌編集小委員会)



## 怒外

天羽一夫

### 薬草に思う

錦町の小宅から北邦野草園は車で5分、折々には行きたいものだが過日シラネアオイが見頃と聞いたので野鳥の見物かたがた出かけた。淡桃色に咲き誇る群落は見事で、本州では仲々みられない。歩道を歩くうちに妙な形をしたザゼンソウ、蛇の頭に似た花をもつテンナンショウ(天南星)、エゾトリカブトなどがみられる。薬草類を山野でみて思うのは紀州の華岡青州である。有吉佐和子氏の小説でも画かれ、昭和38年の日本医学会総会のシンボルマークとなったマンダラゲは全身麻酔の祖青州を讃えるものであった。青州は中国の医聖華佗を崇拝し、彼を目標に努力し、和漢の文献を読み、山野を歩いて薬草を採集して動物で試みたと云う。この結果マンダラゲが全身麻酔剤の主成分に適当なことを発見し、効力の増強と副作用の軽減を図って遂に通仙散を作りあげた。通仙散は蔓陀羅華八分(一分は約0.49)、草烏頭二分、白芷二分、当帰二分、川芎二分、天南星一分を混和したものを二錢(約8g)を砕粉して熱湯二合を加えて1~2回煮沸し、滓

を取り去り、その一合八勺を温い内に飲ませると約3時間後に昏睡状態となり5時間は持続したと云われる。これら生薬の成分を現代化学からみると、蔓陀羅華はスコポラミン、ヒヨスチアミン、アトロピンを、烏頭はアコニチンを含み強い毒性と共に鎮痛作用を持っている。通仙散の麻酔作用はおそらくこの二種の薬草によるもので、白芷のアンゲリコトキシンは中枢興奮作用、当帰のベルガブテンは脳の鎮静作用、川芎のセダノン酸は脳の鎮静と血圧、体温の下降を、天南星のサポニンには鎮痙作用があると云われ、これらが相俟って麻酔状態をつくったものであるが、これはアトロピンとスコポラミンの大量内服による急性中毒による昏睡状態を応用したものであろう。通仙散による全麻手術の初症例は青州の「乳巖治験録」によると五条市藍屋利兵衛の母で60才。最初は豆粒ぐらいいであったが次第に大きくなり乳頭から約7cmの所に変色と、内に茶碗大の石の様な塊があり、これを単純乳房切断術を施行し、20日余りで帰郷したと記されてある。経口投与と云う調節性の無い方法で急性中毒状態を利用することは近代麻酔学のレベルからみると非常に危険なもので、死亡例もあったことであろうが、エーテル、クロロホルムの使用より半世紀も早く、紀の川に沿う田舎町名手の地で近代医学の開花をみたことは吾人にも頂門の一針であらう。

(放射線医学講座 教授)